な狩猟が導入されている地域がある．だがそこで認められているのは，外貨を投下する観光客の狩猟であって，地域住民の狩猟は禁じられていることがある［安田 2009］．つまり経済的な「生産」の持続のために，人々の「生存」がないがしろにされているのである．ここでは野生生物保護のための科学知は，むしろ「生存」と対立的に機能していることになる．したがって「生産」のパラダイムの「慣性」に揺さぶりをかけるためには，マクロな歴史的な視点の転換にあわせて，科学技術を現地社会にどう埋め戻すのかというミクロな視点をもつことが求められる．そうすることによって初めて，本書のような総合的なプロジェクトを出発点として「持続型生存基盤」を構築するための展望が開けてくるだろう．

## 引 用 文 献

Hughes, T. P. 1987. The Evolution of Large Technological Systems. In W. E. Bijker, *et al.* eds., *The Social Construction of Technological Systems: New Directions in the Sociology and History of Technology*. Cambridge, Mass.: MIT Press, pp. 51-82.

安田章人．2009．「『持続可能性』を問う―『持続可能な』野生動物保護管理の政治と倫理」鬼頭秀一・福永真弓編『環境倫理学』東京大学出版会，130-145.

丸山淳子．『変化を生きぬくブッシュマン―開発政策と先住民運動のはざまで』世界思想社，2010 年，352 p.

峯　陽一 *

美しく書かれた本だ．お堅い研究書なのに達意の文章で，上質の小説を読み終えたような感覚が残る．自然のなかで生きる「砂漠の狩人」の時代から大きく変わって，ブッシュマンたちが強制的に連れてこられた再定住地には学校や病院が立ち並び，あちこちで建設工事が進み，外国の NGO 活動家が出入りするようになった．何が変わったのか，何が変わっていないのか．当事者のブッシュマンたちは，この事態をどうとらえているのか．すべてを記録したうえで未来を見通す終章の力強さは，感動的ですらある．

学術書にはいろいろなタイプがある．こつこつと事実を集めて既存の知の地平を押し広げるもの．常識に挑戦し，既成のアプローチを覆そうとするもの．学界の基礎文献として読み継がれていくもの．先端的な研究の到達点を幅広い読者と共有しようとするもの．この本は，これらの特徴を兼ね備えつつ，しかも重要なすべてのアプローチに橋を架けようとしている．たいへんな力業で，周到な計算もあるはずだが，あまり無理を感じさせない．ひとつの自然な作品としての存在感を醸し出しているのは見事だ．

内容を紹介したい．序章ではリサーチクエスチョンが提示される．ブッシュマンは「少

* 同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科

数民族」として南部アフリカ諸国の国民統合の対象になるとともに，「先住民」として国際機関や世界の NGO の関心を集めている．ボツワナのブッシュマンたちは広大な土地から切り離され，新たな再定住地において，密度の高い集住生活を強いられている．歴史的に前例のない状況のもとで，ブッシュマンはボツワナ政府や国際社会と密接に接触しながら暮らし始めた．再定住地において，狩猟採集の生業はどうなっているのか．平等社会といわれた社会の編成原理はどうなっているのか．国家や国際社会との関係はどうなっているのか．この序章では本書全体で明らかにされるべき問題群が提示される．

第 1 章「人々の行き交う原野」はセントラル・カラハリの地域史である．先行研究の丁寧なレビューを通じて，ブッシュマン，バカラハリ，ツワナ人の重層的な関係が明らかにされていく．とりわけ，「テベ」（バントゥー的なもの）と「クア」（ブッシュマン的なもの）が連続的な範疇だったこと，砂漠の環境においてブッシュマンがバカラハリを「取り込む」構図が存在したことが重要である．

第 2 章「脱狩猟採集民化の圧力」は，現在の遠隔地開発計画（RADP）の進行状況を評価する．RADP の再定住地で暮らすブッシュマンは 3 万 6,000 人，ボツワナのブッシュマン人口の 7 割を超える．いわゆる「開発」の対象となったブッシュマンの再定住地，とりわけ著者のフィールドワークの舞台となったコエンシャケネの暮らしの全体像が描写され，本書の議論を理解するために必要な情報が手際よく提示されていく．ここまでが登場人物紹介で，議論の本体は続く 3 章から始まる．

第 3 章「それでも狩猟採集はやめない」では，まず「マイパー」（ツワナ語で不法占拠を意味する．英語の squatting だろう）の暮らしが紹介される．再定住地でプロットを与えられた住民のかなりの部分が，一定範囲で周囲の原野に散らばり，自分たちで勝手に家屋を建てて暮らし始めたのである．人々はプロットでは賃労働に従事したり，配給の食事に依存したりしているが，周囲のマイパーでは基本的に以前と同じ狩猟採集に従事している．興味深いのは，多くの人々がプロットとマイパーを頻繁に往復し，生業に相互補完関係を成立させているという事実である．

第 4 章「美しく住むために」の議論はマイパーの空間配置に関する発見から始まるが，これが何とも面白い．再定住以前の集団の居住の地理的な関係をベースとして，人々が実に見事な「すみわけ」をしているというのである．出身地が違って分配関係もない人々が混住するプロットの方は，居心地が悪い．著者はブッシュマンのマイパーでの「美しい住み方」に驚嘆しつつも，出自集団が固まって暮らす方向性が「外部の論理」と結びついて固定化されかねないことに警鐘を鳴らす．こうして，これまでのブッシュマン研究の蓄積と手法を手堅く使いながら，再定住地の今が鮮やかに浮き彫りにされる．

第 5 章「『平等主義』の葛藤」で，著者はブッシュマン社会に変化をもたらしている核心的な問題に切り込んでいく．まず検討されるのは，伝統的平等社会のやり方を再定住地

に移植したかのようにみえるマイパーのなかで貧富の格差が広がり，そこで車を購入し，牛を飼う「富裕マイパー」が生まれてきているという事態である．相互扶助的な関係をつくりなおす動きがある一方，分配関係から排除される人々も出てきており，ブッシュマンの内部で賃労働の雇用・被雇用関係が広がろうとしている．こうした新しい事態を，昔のセントラル・カラハリのブッシュマンとバカラハリの関係，つまりクアとテベの関係に遡及しながら歴史的に説明しつつ，連続と断絶の微妙なポリティクスを腑分けしていく著者の議論には説得力がある．

第 6 章「ヘッドマンになるのは誰か」は，王やヘッドマンをもたないとされてきたブッシュマンたちが，RADP 時代になって自らの代表を選出していくプロセスを追いかける．代表の候補はアヤコと呼ばれる名望家の血筋を継承し，テベとみなされる（ようになった）者たちだが，ブッシュマンたちは実体を伴わない系譜よりも，直近の家族関係や能力主義を重視するようだ．当局はといえば，本人が受けた教育レベルを重視する．コエンシャケネと他の再定住地の違いも目配りされていて，それが議論に厚みを与えている．私たちは伝統が創造される瞬間を目撃しているのかもしれない．

本書の大団円をなす終章は，秀逸な「自由論」である．20 世紀末に新自由主義の思想と実践が猛威をふるったおかげで，自由とか自己決定とかいうと，議論を始める前から冷たい個人主義だと思われがちだが（だから代替用語としてのエージェンシーが流行ったりするのだろう．ちなみにお隣の南アフリカでは，黒人的なフリーダムと白人的なリバティでかなり語感が違う），自由というのは要するに，最初から結論を押しつけるな，自分（たち）のことは自分（たち）で決める，ということである．しかし，これは前提にすぎないのであって，本当に重要かつ面白いのは決めていくプロセスである．これまでの経過を理解し，相手の考えと感じ方を理解し，互いの立場が変わりうることを自覚し，対話と位置取りを楽しみながら，まあまあ納得できる線で合意していく．このあたりのダイナミックなプロセスを正義を含んだ「美しさ」で評価するのがブッシュマンの感性であり，ブッシュマンから学んだ著者の感性なのだろう．

しかし，この数十年というもの，ブッシュマンを研究する外部の人々は荒々しい論争を展開してきた．欧米の研究者には敵を叩く知的ゲームを好む人が多いのだが，それにしても南部アフリカ研究で「修正主義」などという禍々しい言葉が使われたのは，南アフリカ史研究で少し例があるくらいで，他にはまず見当たらない．近代と伝統，市場と孤立，国民統合と先住民運動，開発と反開発．ブッシュマンをめぐる言説と実践がバイナリーに分極化し，外部の者が勝手に華々しい議論を展開するなかで，当事者のブッシュマンたちは置き去りにされるのが常だった．しかし著者は，これらの言説や理論のすべてが一面の真理を含み，現実に力をもっていることを理解しつつ，それらの矛盾を，あくまでブッシュマン社会そのものの変化に即して検証していこうとする．創造される伝統，想像され

る共同体，構築される社会的アイデンティティを横から観察するだけでなく，自らがプロセスの一部となり，ブッシュマン自身の主体の形成に寄り添っていこうとするのである．この姿勢は「ポスト脱構築」時代の現場主義宣言ともいえるもので，潔い．

本書の限界，というよりは，本書にあまり書かれてなくて評者が知りたいと思ったことがひとつある．「テベ」の論理である．ブッシュマンからみると，バカラハリの向こうにはバントゥー系のツワナ人がいるのだが，ブッシュマンはツワナの発想を内在的に理解したうえで，それに従ったり，反発したり，利用したりしてきたのだろう．では，その「ツワナ的なもの」はどうやって構築されてきたのか．チェケディ・カーマ（ングワトの王）とチャールズ・レイ（イギリス行政官）の関係を掘り下げたマイケル・クラウダー（Michael Crowder）などの研究を読んでいると，20 世紀前半，イギリス植民地当局はツワナ社会を相当に「ブッシュマン的」だととらえていたように思われる（牛を追いかけてふらふら移動し，定住せず，税金も払わない連中）．そんな態度を矯正するために，イギリス人は各地に井戸を掘って，ツワナ人を定住させようとしたのだった．もしかすると，ツワナ人自身の内部に，最終的に自分で従うことに決めた近代の論理との葛藤がありはしないか．ツワナ人のブッシュマンへの権威主義的で家父長主義的な態度は，何か特別な感情の裏返しなのではないか．いささか脱線になるが，そんなことを考えてしまう．

最後まで読んで，己を振り返ってみる．アフリカ地域研究の世界でマクロな政治経済みたいなことをやっている自分は，「クアじゃねえよなあ．ちょっとだけテベかな．すごくテベだって思われてるんじゃないかな」などと考えると，少し寂しい．そういう評者にも，カラハリ砂漠には特別な思い出がある．もう 10 年前になるが，丸山さんや大崎雅一さんに連れられて，本書の舞台の地域で何日か寝泊まりし，さらにセントラル・カラハリにまで足を伸ばしたことがあるのだ．自分のフィールドではない場所に行くのは気楽なものだが，それにしても広大なカラハリ砂漠，青空と雲，ひたすら広がる灌木，スイカ，しつこい砂，そしてブッシュマンの人々のいい表情が忘れられず，今でも鮮明なカラー映像が心に浮かぶときがある．同じ「南部アフリカ」にこだわる者として，カラハリの大地と人々の組み合わせに「原風景」を感じてしまうのかもしれない．

専門家でもないのにブッシュマンの世界に引きつけられるのは，評者だけではあるまい．ブッシュマンの社会にはわれわれが失いかけた何かがある（そういう意味では「伝統主義者」の問題関心は正しいと思う）．ただし，それはノスタルジーの対象というより，われわれが未来のために学ぶべき何ものかなのだろう．それは，類型化された社会の本質というよりは，人と人の関係のあり方にかかわるものであるに違いない．答えは本のなかに詳しく描き込まれている．ブッシュマン研究者や他の先住民研究者以外の人々にも，これから何度も繰り返して読まれていくはずの本，それだけの価値がある力作である．